

令和元年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会(第3期第5回) 議事録

○日 時：令和元年11月19日(火) 18:00～19:50

○場 所：仙台市役所上杉分庁舎2階 第1会議室

○出席委員：風見正三委員長、其田雅美副委員長、石塚直樹委員、大庭克己委員、
佐藤亜矢子委員、島田福男委員、相馬潤子委員、浜知美委員、緑上浩子委員

○欠席委員：伊勢みゆき委員、西出優子委員

○事務局：市民局長、市民局次長、協働まちづくり推進部長、市民協働推進課長、
地域政策課長、市民活動サポートセンターセンター長、
企画係長、事業推進係長、NPO認証係長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

(1) 多様な主体がつながり、協働が生み出される環境の構築にむけて

① 分科会での検討状況及び取りまとめのイメージについて

② 委員会としての総括に向けて

3 報告

(1) 市民活動や協働によるまちづくりに関する意識調査の実施について

(2) その他

4 閉会

○会議内容

1 開会

[事務局（企画係長）]

ただいまから令和元年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。

議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は、西出委員はご都合により欠席でございます。現時点で11名中9名のご出席をいただいております。出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づきまして、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

それでは、ここからは議事進行を風見委員長にお願いいたします。

[風見委員長]

皆さん、こんばんは。今日は、議事で分科会の状況と委員会としての総括に向けてということで、最初にこれからの報告書の取りまとめのイメージを議論した上で、話題提供として、皆様にもいろいろご発表いただきましたので、今日は私からお話させていただきたいと思います。委員会も残り2回となりますので、今日は全体のまとめの方向性を決めていきたいと思います。その上で、今回は最後の委員会になるかと思っています。

それでは、議事録署名人は、佐藤委員にお願いします。

2 議事

(1) 多様な主体がつながり、協働が生まれる環境の構築にむけて

① 分科会での検討状況及び取りまとめのイメージについて

[風見委員長]

それでは、初めの議題として、「多様な主体がつながり、協働が生まれる環境の構築にむけて」ということで、分科会の検討状況及び取りまとめのイメージについて、事務局からご説明をお願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

今期の委員会においては、今、委員長からお話がありましたとおり、「多様な主体がつながり、協働が生まれる環境の構築にむけて」というテーマでご審議をいただいております。前回までの委員会において、最終的な審議の取りまとめとして、1つは東日本大震災以降の協働の取り組みの振り返りと今後の方向性について取りまとめ、市民の皆様が発信していくことを目標に進めてきたところです。

そこで、具体的な取りまとめの内容や方法を検討するために分科会を立ち上げ、3名の委員の皆様にご協力をいただきながら検討を進めてきたところです。本日は分科会での検討の状況と作成予定のリーフレットの検討状況についてご説明いたします。

資料1をご覧ください。分科会のメンバーは、其田副委員長、石塚委員、浜委員にお声

がけをさせていただき、検討を進めてまいりました。

これまで前回の委員会後の9月、10月に2回開催いたしまして、各回とも長時間にわたりご検討いただいたところです。

実施内容の検討状況については、3点ほど項目をまとめました。

1つは、広報用リーフレットの制作でございます。こちらがメインになると思いますが、委員会で検討していたとおり、リーフレットを取りまとめ、市民の方への配布とホームページ上での公開を行う方向でまとめていこうとしたところです。

内容については、ポイントが2つございます。1つ目は、取りまとめたものを一般の市民の方に手に取って読んでいただくことを第一に考える必要があるということで、表紙を中心にデザインを工夫し、文字量が多くなると読みにくいので、文字量をできるだけ抑え、A3二つ折りのもので検討したところです。なお、これは今後になりますが、紙面のデザインはよりよいものを目指していくということで、デザイナーの方の協力も得ながら工夫を重ねていくことも必要になってくると考えております。また、どうしても紙面に限りが出てきますので、掲載内容を厳選すること、そして、ここから次のステップにつながる詳しい情報につながるように、サポートセンターや、以前に取りまとめた事例集などのインフォメーションを載せることを検討してきたところです。具体的な内容については、後ほどご説明します。

2点目は、映像の制作です。前回の委員会の中でも、映像を作ってPRしていくことが話題にあがったところです。分科会でも検討したところですが、2年ほど前に、協働がイメージしやすいものとして動画を制作していることがあり、改めて新規のものを作るよりは、既存の動画を活用していくのがいいのではないかという意見がありました。そこで、既存の映像をさらに活用し、さまざまな外部サイトにリンクをつけていただけるよう依頼するなど取り組んでいこうとなったところです。

3点目として、市民意見の集約でございます。前回の委員会では、より外に開いて、市民の方の意見を得る機会を作ってもよいのではというご意見が出たところでした。それについて、分科会でもワークショップの機会を持つのはどうかと検討したところです。一方で、11月、12月は協働に関する市主催のイベントが比較的多い時期で、先々週あたりからいろいろな催しを行っております。そうしますと、単体でワークショップなどを開催しても、参加していただける方にも限りがあるのではということもあり、むしろ仙台市主催のイベントが数多くあるのであれば、その機会にアンケートなどでご意見をいただくほうが、より多くの方のご意見を伺えるのではないかということになり、基本的にはアンケート実施を進めたいと考えたところでした。併せて、こちらも後ほどご報告いたしますが、本市では年明けに一般の方向けの意識調査の実施を考えており、そういった機会も併せて、より多くの方からご意見をいただく機会を設けて進めていこうとなったところです。

以上が分科会で検討した状況です。

続きまして、広報用のリーフレットについてご説明をいたします。

こちらは先月の第2回分科会で事務局が準備した原案で、分科会の中でも委員の皆様からいろいろご意見をいただいたところですが、本日、改めてこの会議で皆様からご意見をいただいた上で、さらに修正を加えていきたいと思っておりますので、まず、分科会にお示した資料に基づいて、分科会でのご意見や考え方をご説明していきたいと思っております。

全体をまとめるに当たってのコンセプトですが、分科会では、掲載する文字の量と読みやすさのバランスをいかに取っていくかが議論になったところです。この2年間の委員会でご議論いただいた内容をできるだけ盛り込みたいと、ひとつ前の案では文字をできるだけ盛り込んだ資料を分科会で見ていただきました。一方、一般の方にも手に取っていただくことを考えると、文字が多いととっつきにくくなってしまいうところが課題となったところです。そのため、紙面活用を整理し、概要としては、表紙、裏表紙はなるべく見やすさを意識し、デザイン的な要素も含めて、手に取っていただきやすくすることができないかと考えております。逆に、中面は委員会でも東日本大震災以降の取り組みのアーカイブとして必要なものをしっかり盛り込むことが重要というご意見がありましたので、詳しい解説は中面で見ていただく構成にしてはいかがかと作ったところです。

続きまして、内容についてご説明します。

まず、表紙の内容は、前回の委員会でも、例えばキャッチコピーなどで協働の考え方やコンセプトを説明することも必要とご意見をいただきましたが、分科会では、まず手に取っていただくためには、デザイン的に協働をイメージできるようなものを持ってきたほうが具体的にわかりやすくなるのではないかとご意見がありました。また、例えば代表的な活動事例を紹介することでイメージを持っていただくことも考えましたが、市内にはさまざまな協働事例があり、一つの事例で表現するのは難しいのではないかとこのことで、表紙についてはもう少しデザイン的にイメージが湧くようなものを、例えば、今「多様な主体によるパートナーシップ」と書いてありますが、ここもイメージを膨らませるデザインにできないかと考えているところです。現行の紙面は事務局でデザインしたものです。このあたりをプロの知恵を借りながらデザインしていければと考えております。以上が表紙の考え方です。

続きまして、見開きの中身です。こちらについては、項目として4点ほど盛り込んではどうかと考えています。左側上段に推進委員会の取り組みとして、これまでの委員会の議論や、仙台市として行った施策の解説を記載しています。また、右側上段の仙台市の協働のあゆみは、これまでも委員会の中でお示ししてきた年表を取りまとめて掲載しています。下段左側には、事例ということで協働事例紹介のコーナーを設け、下段右側には、今後に向けて記載する部分を作ってはどうかと考えております。

書きぶりや表記の仕方については、今後さらに検討していきますが、大きな考え方について申し上げますと、上段の協働のあゆみについては、内容によってはもっと解説を加えなければ一般の方にはわかりづらい部分がありますので、注釈のような形で説明を加えることを考えています。

また、協働事例紹介については、当初は前回までの委員会で3名の委員の方に事例紹介をしていただきましたが、紙面も限られているので、一番身近な地域の中での協働の取り組みを取り上げるのがいいのではというお話がありました。そこで、島田委員に前回ご報告をいただいた内容をご紹介できればと考えております。また、その事例を表紙に持つてくることも考えましたが、収め方として一旦この位置でどうかと考えております。

また、今後に向けては、メッセージも含めて、委員会で議論してきた内容をまとめていきますが、本日は、風見委員長からも委員会の総括に向けてお話をいただきますので、その内容も踏まえて検討したいと考えております。

最後に、裏表紙です。このリーフレットを手にしていただいたときにより詳しい情報を知りたい、あるいはご自身で何かを始めるときに次のステップにつなげられるような情報を得たいという方に向けたインフォメーションとして、市民活動サポートセンターや協働ナビゲーションサイト、また、委員会で作成した事例集をご紹介し、次の情報につなげられるようにしております。

今申し上げましたように、分科会でもさまざまなご意見をいただけてまいりました。さらに今日ご意見をいただく中で、ブラッシュアップをしてまいりたいと考えております。以上です。

[風見委員長]

前回の委員会の後、分科会を立ち上げていただき、其田副委員長、石塚委員、浜委員には大変お疲れ様でした。今の説明に対して補足をいただければと思います。

[其田副委員長]

事務局から説明があったとおり、今日の段階では確定版ではありませんので、デザインを今後バージョンアップして、さらによりよい見せ方をしていくというコンセプトは変わりません。皆さんにご意見をいただきたいのは内容の部分で、こういう視点が不足しているのではないかといったコメントをいただき、よりよい冊子を作っていきたいと思っております。ぜひ積極的なご意見を頂戴できればと思っています。

[浜委員]

今日は宮城大学のリーフレットが配布されていますが、大変参考になります。

予算がない中でも、やはり協働に興味がない人でも手に取るぐらいの内容にしていきたいと思っていますが、期間もあまりないので、入りやすさみたいなものを少し検討したいと思っています。

[風見委員長]

今お話しいただいたリーフレットですが、大学ではデザインのブランディングを見直し

ていて、パンフレットも全部作り変えています。構想と見やすさ、やはりビジュアルが重要です。少ない枚数だと結構難しいですが、メッセージの伝え方とデザインをさらに検討していただければと思います。どうしても文字が多くなるので、凝縮したメッセージで中身を際立たせることも必要だと思います。分科会委員の皆さん、ありがとうございました。

それでは、全体の審議に入りたいと思います。全般的にどんなご意見でも結構ですので、何かいただければと思います。

[緑上委員]

このパンフレットを渡す相手はどのような方を想定しているのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

協働に興味がある方はもちろんですが、できるだけ間口は広げたいと考えておりますので、協働という言葉聞き慣れていないような方にも広く手に取ってもらうことを想定しています。

[緑上委員]

その想定ですと、漢字が多いと感じました。漢字を使って要点を短くという意図はわかりますが、漢字が多い文章は一般に読まれない傾向があると思います。せっかくかわいいデザインにしても、文章が硬い。例えば、「多様な主体間の協働」という言葉は通常の生活の中で使いませんし、推進委員会の取り組みでも、「施策の方向性に関する審議」、「少子高齢化の進展に加え」など、いわゆる役所言葉が並んでいるように思います。一般の方がすらすらと読むのは厳しいと思いますので、できればもう少し平易な言葉を使っていたきたいです。

[風見委員長]

もう少し平易な文章のほうがいいかもしれないですね。

[緑上委員]

興味のある方には理解できるかもしれませんが、ない方には何のことかわからないと思います。小学生でもわかる内容だと、すごくいいですね。ただ、そうすると文章量が多くなってしまいますが。

[風見委員長]

表現を少しやわらかくするだけでもいいと思います。他にはどうですか。

[相馬委員]

分科会で検討していただいて大変ありがとうございます。私は、見開きのところを見たときに、協働のまちづくりって何だろうと楽しみに開いたのに、推進委員会の取り組みが紹介されているのはどうなのかなと思いました。例えば、改修したサポートセンターで楽しく活動している写真など、何か活動をイメージできるようなものを載せて、この推進委員会の取り組みはあえてここに出さなくてもいいと思いました。そうすれば、文字量も減りますし、写真などを多用して訴えていく形がいいのではと思いました。

逆に右側のあゆみはおもしろく、こんなふうに震災後に取り組んできたんだと仙台市の動きがわかります。こういう部分を大切にしていってほしいと感じました。

[風見委員長]

確かにこれをもっと凝縮して、メインに何を置くかが大事になりますね。あゆみができて私もよかったと思っています。仙台市がしてきたことを総括的に、要素でまとめてもいいかもしれないです。お配りした大学のリーフレットは組織の案内ですが、窓口としてどういう関連性を持つかをよくある三角形の図にしています。多分、協働まちづくりの概念がどうつながったらいいのかが最初にあって、その中に委員会がやってきたことがあるといいと思います。ボリューム感やレイアウトについて、少し議論してもいいのかもしれない。

他には何かございますか。

[佐藤委員]

施策の例には写真がありますが、興味を持った方がそれはどういうことかともう一步踏み込んで知りたいと思ったときに、例えば横にQRコードがあり、読み込めば詳しい活動が見られるといった仕組みがあれば、紙面の文字数を絞れると思います。ただ、興味を持った人はどんどん情報を得られますが、まず興味を持ってもらえるような紙面にしたほうがいいと思いました。

[風見委員長]

その点もとても重要だと思います。いろいろなものが連携するリーフレットを作るイメージですね。

[大庭委員]

先ほどもおっしゃった方がいらっしゃいましたが、おそらくいろいろな角度から作れるだろうと思っています。この組織の取り組みの紹介や仙台市の協働のあゆみをまとめるのであれば、こういう形でいいと思うのですが、市民の皆さんに協働のまちづくりや地域の活動にぜひ参加してほしいと作るのであれば、もっと具体的な、それぞれの地域でやって

いる取り組みを見せることで、自分たちの地域でやっているイベントなら少しは参加できるんじゃないかなと思ってもらえると思います。これを見ることで参加してみようというきっかけになればいいかなという感想です。

[風見委員長]

基本は協働まちづくりが今まで施策的にどう進められてきたかという整理でもあります。一方、市民に向けて発信しなければいけないので、そういった内容を盛り込むと枚数が増えるかもしれません。今の両面で発信しようとするので紙面が足りないのか、もしくはうまくやりくりするのか。いかに政策が進展してきたかを整理すると同時に、市民にどんどん入っていただいて、いろいろなところにつなげるという2つの意味があると思います。その辺りは悩ましいですが、見開きで収まればということですね。

[事務局（市民協働推進課長）]

私たちが中面については、これまでどのように進展してきたかをうまく表現できればいいと思っておりますが、原案を作るに当たっては、推進委員会の取り組みについてという題名がいいのか、あるいは、これまでの仙台市の取り組みだけではなく、社会全体の考え方を書くべきかなど、悩みながらやってきました。今のところ、委員会で審議を行っていただいた結果にもとづいて、仙台市が実施してきたプロジェクトの紹介をしていますが、市民の方に伝わりづらいとなると、内容はそのまま少し表現を変えるか、あるいはもう少し違うものにするか考えなければいけないと改めて考えております。

[風見委員長]

あゆみを見ていただくとわかるように、仙台市は以前の市民公益活動促進委員会から、2015年度に協働まちづくりを掲げて大きく政策転換をしてきたので、その部分がどうつながって、今どう展開しようとしているのかを整理する重要なリーフレットでもあります。2011年があり、これまで進めてきたことをどう表現するかだと思います。形にこだわらず、協働まちづくりがどう進展してきたのか、もう少し検討していただければと思います。

[島田委員]

表と裏は、見ただけでわかるのですごくいいなと思います。ただ、全部が見ただけでわかるようだと深みが出てこないで、やはり中に文字が出るのは多少仕方がないと思います。ただ、この協働のあゆみのように表になっているとわかりやすいですね。

[風見委員長]

そうですね。この表は価値があると思います。今までの歴史をまとめる時期にあることもこの3期の委員会の重要な役割です。仙台市は、市民協働でトップランナーになって、

それが全国に広がり、もう一度協働のまちづくりとしてリニューアルしたのが2015年ですから、その変曲点をうまく形に残しておくという意味もあります。いろいろな要望がありましたので、分科会でもう少し検討していただければと思います。今回のようにたたき台ができてくると意見ができますし、いいものになると思います。いろいろなバランスを取るともう1枚増えますが、安易に増やすことはないと思います。今島田委員からもメリハリが重要というご意見がありましたので、写真などの組み合わせも検討してください。

〔其田副委員長〕

ページが少ない中で、どういうものを盛り込み、絞っていくかになると思います。先ほど何名かの方からご意見を頂戴しましたが、この委員会で過去に作った協働まちづくりの実践と手引きでは、市内で行われている事例を紹介しています。写真も多様に使って、立派な冊子を作りました。今回のリーフレットで私が心掛けていたのは、協働の手引き・事例集と少し違った視点で、ページ数は非常に限られますが、市民の方々にわかりやすく周知できるツールにすることです。バッティングしている部分も若干出てきますが、今委員長がおっしゃったように、これまでのあゆみは外せないですし、市民の方にこれまでの施策などをいかにわかりやすく説明していくかがポイントだと思います。深掘りして知りたい方のために、QRコードを盛り込むことも非常にいい意見です。

〔佐藤委員〕

協働のあゆみを興味深く拝見しました。さきほど風見先生がおっしゃった転換点は、色やグラデーションなどで表現すると、ぱっと見たときにわかりやすくなると思います。

〔石塚委員〕

私も分科会に参加させてもらいましたが、やはりこの10年の歩みをしっかり記録することが大事だと思っています。さきほどから年表が大事だというご意見がありますが、私も同感です。ただ、分科会のときにも発言したのですが、例えば市民活動サポートセンターのイベントにあるマチノワなどは、初めて見る方は何のことかわからないと思うので、レイアウト次第ではありますが、年表の解説をもう少しわかりやすく入れられればと思います。2015年の転機や、それ以前、それ以後の流れが見えると、文字は多くなりますが、より意味のある情報になるという気がしました。

〔佐藤委員〕

例えば、このリーフレットの情報を仙台市のホームページに載せる場合に、リンクからさらに深い情報に辿りつけるような仕組みになっていれば、ここに盛り込めない詳しい内容が読み込めると思いました。すごくいい内容なのにリーフレットに載せきれなかった情報は、そういう形で表現できると思います。

[風見委員長]

リーフレット自体をダウンロードできるようにしたとき、市民協働や協働まちづくり情報が一度に拾えるリンクをまとめたページを1ページ作るのもいいですね。これがダウンロードして印刷ができて、さらにアナログ媒体として紙で出回るとは重要だと思います。ですから、QRコードで情報につながるという双方向のリーフレットとして作ることは今回とても重要だと思います。今までの経緯が全てわかるあゆみは、皆さんに説得力があると思いますし、ここまで10年、ぶれずに施策を進めてきました。それを皆さんに見ていただいて活用していただくための審議が3期の一番重要な点なので、いかに活用してもらうかがゴールだと思います。今言った紙媒体と電子情報がつながっていることが大事です。皆さん、事務局とご相談していただいて、必要に応じて分科会でもご検討いただきたいと思います。

[浜委員]

完成した後、見てもらえるように発信していくことも大事だと思います。

[風見委員長]

そうですね。今までやったことをしっかり発信していくのがこの3期の使命なので、いいところまで来ていると思います。

[事務局（市民協働推進課長）]

今お話を伺っていて、10年間やってきた転換点が非常に大事だと改めて思いました。この施策の例にしても、そういう転換点や、コンセプトがさらに発展してきたからこそ、こうした施策を仙台市として進めてきたということがありますので、その辺りがうまく伝わるとよりよくなると感じたところです。併せて、ウェブへのリンクなどでさらに先を見られる仕掛けなども考えながら整理していきたいと思います。

[其田副委員長]

実は、右側のあゆみと左側の例はリンクしてはいますが、①②③と書かれた部分はあゆみとつながっていますが、市民の方が手に取ったときに、左と右が別のものに見える可能性があります。事務局にまとめていただいた点については、もう少しわかりやすく転換期などを表現したり、あるいは作り込みの仕方や配置を再検討する必要があります。

[相馬委員]

何度もこだわるようで申し訳ないですが、先ほど大庭委員がおっしゃったように、参加してみたいという思いを一人でも多くの方に持ってもらえるようなリーフレットにしてほ

しいと思います。こういうことをやってきたという実績は、あゆみを生かしてもう少しコンパクトにして、私もやってみたいと思えるようなレイアウトを考えていただけたら嬉しいです。

[其田副委員長]

今の相馬委員のご発言に関して、市民の方々が事例を見て、協働に興味湧いて、ということなら市民活動に参加してみようというきっかけになるのであれば、事例を載せている部分を少し増やすと見やすくなると思います。ただ、分科会の当初の会では、協働事例を1ページ使って紹介する案になっていたのですが、前期に作った手引き・事例集とパッチングする部分が多く出てきてしまいます。事例集と内容の重複を避けるため、事例紹介をコンパクトにまとめたいという意見から、今日ここに出した内容になっているところです。ただ、市民の方が手引き・事例集より先にこのリーフレットを手にとったとき、市民活動に参画するかと問われると、そうではない作り込みになっているかもしれません。ターゲットを広く市民に置くということで、見開きの部分も改善し、よりよいものを作るという方向性はこの委員メンバーで一致していると思うので、そこは大事な視点だと思います。

[緑上委員]

QR コードで協働の手引きや事例集に飛べるのなら、興味を引くようなキャッチコピーで読者を掴んでいくことが大事になってきますね。

[佐藤委員]

先ほど其田副委員長からご説明があったあゆみと説明の関係については、言われて初めて気がつきました。手に取る方には事前に説明ができませんから、再度検討していただけるとよいかと思います。

[風見委員長]

確かに具体的な表現、デザインは今後よくできると思います。今日重要だったのは、市民に対してアプローチがしやすいようにという部分で、いかに見せるかに力点を置くということで合意がされてきているような気がします。整理すると、これについては、事務局で今日の意見をまとめて、いくつか方針を練った上で、もし可能であれば分科会を開いて、私にもまた相談いただければと思います。今日の意見を踏まえて改善したものを再度見せてもらうということでいかがですか。多分わかりやすさと、このあゆみからどんなものが生まれて、それに市民がどう関われるのかをつなげる部分ですね。あゆみと実際の事業を一体的にどう見せるかということでまとめていければと思います。また、QR コードも活用して、これがダウンロードできて、紙でも配って、双方向のつながりを作りたいと思いま

す。

ワークショップがなかなかできないことについては、具体的にこのリーフレットをど
んなところに出すか、告知をどうするかを、次回までには整理しておいてください。

[事務局（市民協働推進課長）]

最後に紹介させていただきますが、我々のほうで協働のまちづくり助成事業の中間報告
会を兼ねたトークイベントということで、基本的には実際に助成を受けて活動していらっ
しゃる方の報告会ですが、活動を進めるにはどうしていけばいいか、あるいは、情報を得
るためにはどうしたらいいか、そういうヒントについて皆さんで考えるイベントを12月に
予定しております。そこに集まった方にアンケートをお願いして、意見を集約していきたい
と思います。併せて、協働によるまちづくりのPRもできればと考えております。

[風見委員長]

具体的にどんなイベントがあるのかをリストにさせていただきますか。それと、来年度ど
んなところでリーフレットを配布するかの計画も出させていただきたいと思います。確かに
今までもたくさんのディスカッションをやってきたので、重なるようであれば新たに実施
する必要はないかもしれません。他の事業とうまくリンクして、このリーフレットを使っ
て、しっかり告知していただければいいと思います。

映像については、これまで作ったものがありますので、リンクを設けるとか、ウェブで
コーナーを作るでもいいと思いますので、検討してください。今までの成果に辿りつける
ことがとても重要なことで、それを見てこんなこともできるのかと参画につながるよう
にさせていただくのがいいと思います。

それでは、もし言い足りないことがあれば、事務局へメールしていただければと思いま
す。今日の結果を踏まえて、次回に向けて、最終案を作っていただくということでお願い
します。分科会は開いていただけるんですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

事務局でも原案の取りまとめに少しお時間をいただき、皆さんのご都合を伺いながら進
めたいと思います。

[風見委員長]

次回の委員会は2月でしたか。

[事務局（市民協働推進課長）]

今回は3月上旬を考えております。それまでの期間に、私どもで再度原案を練って、分
科会の皆さんにもご相談する機会を設けたいと思います。

[風見委員長]

メールなど個別にでもいいと思うので、原案を見ていただいたらいいと思います。

[浜委員]

予算が限られた中であまり無理も言えないのですが、分科会でデザインに関して意見を出しても、予算の関係でできないとなると結局スタートに戻ってしまうので、はっきりこのぐらいしか出せないとわかれば意見を出しやすいです。アイデアを出しても実現できないこともありますので。その後、デザイナーに依頼して進めるということでしたので、私たちがデザイナーの選定に入ることができないかと伺ったところ、契約上の制約などもあり、難しいとのことでした。これから分科会で意見をして、デザイン上、うまくいかなかったりしないでしょうか。

[石塚委員]

この委員会でデザイナー選定にも意見ができればという話をしたのですが、事務局から説明いただいたのは、限られた予算で制作すること、また契約上の制約もあることから選択肢も限られるということでした。

[事務局（市民協働推進課長）]

私たちが、どういったところに相談先があるかを調べていて、仙台の若いデザイナーや、起業したデザイナーが集まるネットワークを通じて、ご協力いただける方がいないか相談しているところです。デザイナーやデザインの選択をできる可能性があるか、状況が分かり次第、分科会と委員会の皆様にも展開させていただければと思います。

[緑上委員]

このパンフレットを協働で作ることはできますか。例えば、専門学校の皆さんにご協力いただくなどが考えられます。

[浜委員]

これからデザイナーを決めてやっていくのですが、3月の仕上げまでに私たちの意見で再度変える必要が出てきたりすると、あと3カ月でできるか不安なところです。

[事務局（市民協働推進課長）]

内容の部分と、デザインのよしあしがあるかと思います。内容として何を盛り込むかは事務局でまず一度整理させていただきから、ご相談したいと考えています。

[風見委員長]

デザインは大事ですね。12月中に原案をみんなで確認して、デザイナーが決まれば、その後はデザインを決めていくことになりますね。そのデザインを踏まえてもう一度委員会で議論して、3月に間に合わせるということですね。

今日の意見を踏まえて、分科会メンバーにメールなどでもう一度意見をもらってください。時間も限られているので、事務局でまずは今日の議論をもとにたたき台を作っていたら、もう一度分科会に上げて、それからデザイナーを決めて、デザインを踏まえて打ち合わせをして決めるということでしょうか。最後の委員会では、完成版の原稿を見ることになりますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

3月の委員会では、ほぼ仕上がっている状態のものを準備できればと思っています。

[風見委員長]

配布するのは4月以降ですね。最後の委員会でもう一度確認できますが、そこからデザインはあまり動かさないということですね。

[浜委員]

分科会では真剣に考えて、本当に思っていることを言うのですが、制作予算などによって実現できることは変わってくると思います。不可能なことを言い続けても、結局それは時間の無駄になるので、予算などの事情がわかればそれに見合った意見ができるのですが。

[事務局（市民協働推進課長）]

先に一定のラインをお示しするほうが加減がわかるかと思っていますので、次回はその辺りも含めてご相談したいと思います。

[風見委員長]

3期の重要な成果になりますので、最後までみんなで議論していきたいと思っています。それでは、以上で議案の①は終わります。

②委員会としての総括に向けて

[風見委員長]

次に、この委員会の総括ということで、先ほどのリーフレットの中にも枠を準備していただきました。総括といってもあまり大きな話をするつもりはなく、今まで各委員からいろいろな事例提供やご報告をいただいたので、私からも話題提供をと用意してきました。

私としては、市民公益を2期、協働まちづくりを3期務め、協働の転換期にこの委員会

に関わられてとても嬉しく思っております。やはりいろいろなことをやってきたと思いますし、今後まとめていく上での施策はできたので、3期はそれをどう広めるかです。コンテンツを作るというより、プロモーションをどうするかが今期はとても重要です。このリーフレットを作ることでつなぎの役割が果たせるので、今日はとても重要な審議だと思います。協働まちづくりを謳ってきて、自分自身がこの10年間どう捉えてきたか、今までいろいろな事例を発表いただきましたが、大学に所属している立場でもあるので、大学として、また、いろいろなプランナーとしてプロジェクトを仕上げてきたことも踏まえ、最近の大学が地域連携をどうしているか、震災復興を含めて扱ってきた事例をお話しします。協働とは何かということを考える機会にしてもらえればと、特別の講話のようなものを作りました。

お配りしている資料は、宮城大学が2017年に20周年を迎えましたが、私は大学開学以降、学群長をやっており、今年から地域連携の担当理事になったので、作り変えたパンフレットです。地域に開かれていることのいろいろなチャンスを重要視していて、事例が載っているとみんなワクワクするのではないかと、写りが良さそうな写真を選びました。手掛けた森の学校も出ていますが、絵になる物が作れるかは大学としても重要だと、私はそういう立場で地域連携センターを引っ張っていきたいと思っています。この委員会ととても近いと思いますが、地域で、協働で何を作っているのかということところです。宮城大の事例も含めて今日はお話ししたいと思います。

もう一つ配布した冊子は、石巻で小林武史さんが実施しているリボーンアート・フェスティバルのものです。私の大学のコミュニティ・プランナーという講義が連携して石巻のリボーンアート・フェスを応援しました。リボーンアート・フェスは全国的なアーティストを招いて地域を活性化する取り組みですが、我々の大学は地元ネットワークがあり、もともと地元の方と大学がつながって何ができるかとチャレンジしていました。小林武史さんは震災復興を真剣に10年やると言っているため、どういうリンケージができるかと考え、今回は地元の食材を使った食材開発をしました。学生も入ってどのように地域おこしができるかをより具体的に見せるために、リボーンアート・フェスティバルに参加しました。最後のほうに私と小林さんの対談を収録してありますが、地域の魅力を五感を通じてどう発信できるか、それに大学という知的な拠点は何ができるかをまとめてあるので、後で見ただければと思います。

私が今一番取り組んでいるのは「地域主体によるコモンズの創造」です。コモンズという概念はとても古くて新しい概念で、共同体とか共有地という意味ですが、協働まちづくりで言えば、例えば地域全体を共有地、みんなのものと考えることによって協働が成立し、それがイコール、パートナーシップを生むということで、この委員会でもやってきたマルチステークホルダー・パートナーシップということです。

コモンズの悲劇という有名な研究があります。イギリスでみんなで自由に牧草地で牛を放っていたら、自分が得する人がどんどん牛を放って共有地が荒廃してしまうというハー

ディンの論文がサイエンスに出されて有名になったのですが、それを荒廃させないために、それぞれがローカル・コモンズというルールを作ることで、その共有地が守られる。私有化すると、結果的にそれぞれが使うところと使わないところに分かれてしまって、効率的に使われないんですね。ですから、私有化ではなくて共有、みんながまちは共有であると思うことが必要だということが、まちづくりや地域づくりを実際にやってきたらわかると思います。自分の家にごみを捨てる人はいませんが、まちでは捨てる人を経済学で探求してきたのがコモンズで、これから 21 世紀はコモンズの思想じゃないかなと、私はいろいろなところで言っています。

私は今、大学の理事・副学長も兼ねておりますが、専門はまさに地域連携、地域づくりです。もともと学位が建築で、都市計画に進んで、それから留学して経営学をやって、その後、環境政策で博士号を取っているの、とても広いんですね。なぜそうなったかというと、1992 年のロンドン地球サミットで宣言をまとめることがあったので、帰ってから東京工業大で博士号を取ったんです。今 SDGs がとても大きな政策課題になっていますが、20 年来、持続可能な地域創造とコミュニティビジネス、コミュニティデザインをやってきて、それが誰もが知る専門になったということです。

いろいろなまちづくりをやってきましたが、もしよかったら建築計画、経営学、環境アセスメントなどいろいろな本も書いているので見ていただきたいと思います。建築・都市・経営・環境という私の専門を融合した新しい学問を総称するのがコモンズです。

この委員会で何度も言っていますが、震災が東北においてとても重要な意味をなしていると思います。現代の文明社会に対して警鐘を鳴らしたこと、まちづくりを担当している者にとっては、これを変曲点と捉えない人はいない。阪神・淡路大震災のときに NPO が登場して、地域を下支えするのは行政だけではなく市民の力ということがわかりました。その後、東日本大震災では、市民ないし地元の企業が地域を活性化する事業を全国の力を借りて始められたことが大きく、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスの元年と呼ばれています。

震災復興以降、私が提示してきた政策は、地域主体の地域循環型産業を作ることです。実際に、ミュージックセキュリティーズやソフトバンクなど、いろいろなファンドが東北に作られました。地域が地域のために産業を循環させようとしたときに初めて地域に対して投資できるスキームができました。それはソーシャルな投資スキームと言われていますが、地域が循環すると地域の中でお金が回るの、外からお金が来たときに外に逃げていかない。これが一番重要なことだと思います。

私なりに、震災を含めて協働まちづくりをどう考えるかをまとめています。

1つは、社会的共通資本という概念は宇沢弘文先生が唱えたものですが、一番大きい社会的共通資本はコミュニティです。地域の歴史や文化を維持しようとするとき、地域資源が廃れてくれば、地域産業も廃れてくるので、これを再生させるために重要なのはやはりコミュニティだと思います。地域資源は、協同の精神という言葉で表わせますが、協同組

合の精神を作ったのはロバート・オウエンという人です。株式会社のような資本家と労働者ではなくて、一緒に出資して作るのが協同組合です。地域の中でみんなが出資して、地域が活性化するための仕組みを作り、支え合いや相互扶助、今まで経済にならない部分を含めてコミュニティがしっかりとその機能を持っているということが豊かさでした。それをもう一度作れないかと、私はコミュニティビジネスを生み出したんです。そこが向かうところは、クオリティ・オブ・ライフとサステナビリティで、これから21世紀の大きな指標になると思います。

では、どんなふうに生活の質を上げて持続可能性をよくするかということで、1990年代ぐらいから取り組んできましたが、1つはコミュニティビジネス、地域で市民協働からさらに協働まちづくり、地域を元気にするビジネスを作ることだと思っています。それと、もう一つは、それを実際デザインしてまちづくりの形に具体化することです。

私自身は大学にいますので、大学で何をしてきたのかをお話しします。大学で唱えているのは、東北未来創造拠点になるべきだということです。大学の歴史は、1997年に開学して、2009年に法人化されました。2017年にちょうど20周年を迎えて学群に改組したのですが、私が2012年からずっと携わってきた地域連携型実践教育というものがあります。コミュニティ・プランナーは、文科省のCOCなどいろいろな補助事業の前身で、震災を受けた兵庫と宮城の公立大学で、連携して震災や防災を含めた地域を支える人材を育てる教育を作ろうと始めたものです。5年かけて何とかプログラムを作り、2017年に文科省の事業が終わって大学が学群制になったので、このプログラムを中心に1年生の全学研修として地域フィールドワークを開講しました。これまでの経緯があるのでいろいろなことをやっていますが、地域人材を作るためにいろいろな自治体にも連携してもらい、1年生420名を受け入れてもらっています。2、3年生のコミュニティ・プランナーの場合は100名ぐらいですが、ずっと続けてきました。1年生の420名、全3学群の学生を地域に出すという大変な仕事ですが、高校から大学に入ったときに、地域で自分に何ができるかを感じてもらうことが目的です。2年目に、420名の中からさらに地域のことをやりたいという人が100名ぐらい残って、前期にコミュニティ・プランナーの概論、後期に地域の問題を解決しソリューションを出せるよう実践論を学びます。3年生の前期はフィールドワーク演習を行います。この時点で100人が60人になり、さらに20~30人になります。そして4年次にコミュニティ・プランナーアソシエイトの認証資格を出すプログラムが完成しました。これを7年間かけて作ってきたので、1つの成果が出せたと思います。地域に行くまでのイニシエーションや、いろいろなリテラシーを学んで、自治体にも話をしてもらい、フィールドワークをして、課題をまとめて地域の方にプレゼンするという講義です。

コミュニティ・プランナーとはそもそも何かというと、地域が抱える多様な課題を解決するコミュニティづくりに貢献できる人材のことです。まだ開始から7年目で、卒業生が出て3年目、まだ30名ぐらいですが、これからどんどん増えると思います。

イメージしているのはサステナブルです。資料には「GREENの視点」として、産業やい

のち、デザイン、これは GREEN BUSINESS、GREEN CARE、GREEN DESIGN と書いてありますが、最終的にはいのちの循環やつながりを展開していくプログラムをみんなで考えるということです。生命のつながりを再生する多角的なアプローチ、これが今まで連携してきていただいている市町村やいろいろな地域の方に参加していただいて、そういうところで学生がいろいろな気づきや地域への愛に目覚めて、また地域に帰ってきてくれればいいと思っています。

石巻では、地元の漁師の方や地元の人たちと一緒に、地域の課題を勉強して、提案してきました。100人ぐらいの学生が入りましたが、その中からプロジェクトを選んでブラッシュアップして実施しました。これは9月のリポーンアート・フェスの会場で、デザインを学ぶ学生が屋台を作って、地元のアナゴを使ったスープやラーメンを作りました。まだまだ遊びに近いですが、地元の中で同じ食材をどう使うか、学生がその地域の人たちと交わって何ができるかをプロジェクトにしています。

それを、兵庫県立大学と Google ハングアウトや Zoom などをつないで共同発表会して、議論しています。これも結構おもしろくて、違う地域の事例を評価し合っています。

こうしたコミュニティ・プランナーを続けていくと同時に、地域と連携したプロジェクトということで、私が中心に行ったものを、何点かご紹介します。

東松島とは、津波で流された宮戸小学校と野蒜小学校を統合して、森の学校ということで宮野森小学校と名付けて、被災した子供たちと一緒に、みんなで意見を出し合って学校を作りました。C. W. ニコルというナチュラリストが協力してくれて、彼らの仲間も連れていったところ、学校をみんなで作ろうとなりました。これはワークショップをやっているところで、使う人である子供たちと教員が意見を出し合いました。公共施設を地域の力で作るというのは協働まちづくりの実践になると思うんです。そのときの私のスケッチですが、目の前の森を取り込んだ学校を作りたいということで、木の形の柱などをデザインしました。こういう木のデザインを建築家と協働して作りたいというみんなが夢に描いたものが実現することが、希望や社会の信頼を作っていくので、それができたと思います。青々とした緑が見えますが、造成を最小限にして森を残し、学校が森に突き出すような形に作ったので、森の近くの学校ですが、森と一体化したデザインになっています。目の前の森が残されていて、鳥たちが下りてくるのが見えるんです。目の前には水も流れていて、子供たちにとってすばらしい環境ができたと思います。今、不登校率がゼロで、残食率もゼロという新しいデータがどんどん出てきています。学校の先生だけではなくて、地元のいろいろな人たちに教えていただく仕組みを作っていて、コミュニティ・スクールという言葉はありますが、森の中でどこまで教育ができるかということに取り組んでいます。

また、グッドデザイン賞にはコミュニティデザインの分野があり、子供たちと一緒に学校を作り上げたということで、2017年に賞をいただいています。東松島と大学、いろいろな協力者と一緒に受賞できたので、とてもよかったと思います。今までのプロセスを来年3月に出版するので、ぜひ手に取っていただければと思います。今いろいろなところから

相談が来ていますが、ぜひ仙台市もこういう、完全木造の学校を作ってみてはどうでしょう。作るのそれほど難しくなく、コストもそれほど高くないです。長期的にみんなで維持すれば、鉄筋コンクリートより長く持ちます。そんな活動をしています。

さきほど話があった石巻の萩浜では、地元のお母さんたちとアナゴスープを作ったのですが、全然食べられない味で随分叱られました。語り合うより、協同で物を作ったり食べたりしたほうが信頼感が増すという研究結果があります。一緒に片づけたり、汗を流したりすることが大事で、まだ始まったばかりですが、宮城大学と石巻のいろいろな連携ができればいいなと思っています。

また、富谷市しんまちのリノベーションにも参加していて、これは内ヶ崎という醤油・味噌の有名な老舗があるんですが、それを使ってどんなまちづくりの拠点ができるかと、学生と一緒に入っていて、学生はまちづくりの拠点のコーナーができないかと取り組んでいます。これは来年5月ぐらいにオープンする予定です。

それと、最近台風被害があって、大学として地域連携担当理事として何ができるかと考えて、まず関連の教員にも入ってもらい、大学でボランティアバスを出しました。今、大和、大崎の鹿島台、大郷、丸森に毎週ボランティアバスを出しています。このとき思ったのは、地域の絆というのは、やはり日ごろの関わり合いによってできる。ですから、防災やまちづくりをするためにも、そうやって地域と一緒に考える教育や実践がすごく重要だと思っています。要は、自分の本当に大好きな付き合いがあるところが被害に遭ったらすぐ行くという、そうなることがやはり本当のまちづくりだと思っていますので、学生が手を挙げてくれて嬉しかったです。

いろんなところで楽しい思いをしているようにも見えますが、話を聞いて提案をして、実際にやるとなると大変長いスパンがかかるので、これからだと思っています。やっとそういう教育の形、理想としていたものができたかなと。地域と共に考える、解決する、未来を創るということで、地域の未来にみんなが当事者として関わるのが重要だと思っています。

私は協働社会のことをいろいろな講演で語ってきましたが、この委員会ではあまり話したことがありませんでした。協働社会には1990年代ぐらいからずっと取り組んできていて、一番大事なのは市民セクターだと言っています。第1セクターが行政、第2セクターが企業、第3セクターがその合同体でいろいろな失敗例が出ました。今は第4セクターの時代だと思っています、市民は行政や企業に陳情するのではなくて、しっかりと連携を呼び掛けて、パートナーシップを作る時代だと思っています。これまで市民はセクターになり得ませんでした。自治会などいろいろありますが、事業を起こすような組織がセクターですので、地域で事業を起こすための組織体をどう作るかが大事です。私はビジネスの世界とNPOの世界の中間にいたので、NPOができたときに、ボランティアかビジネスかではなく、NPOができたと認識しました。これは私がいつも話しているコミュニティビジネス、ソーシャルビジネスの定義ですが、常に社会貢献なのか利益追求なのかということを言われますが、NPOは経済的になかなか自立していけないので、やはり私は、社会貢献をしながら利益

追求をするビジネスを生まなければいけないと思っています。今度の協働提案事業もそこを育ててほしいとずっと言ってきました。それが社会をよくするビジネス、地域をよくするビジネスで、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスと呼んでいるものです。私は、志を出発点として、適正な利益を求め、社会貢献と経済発展を両立させる事業、つまり利益を適正に求めれば、社会貢献と経済発展を両立させるモデルがあって、その出発点はやはり志であるということは何十年も言ってきました。

それができるとどうなるかという、行政主体だった地域社会ですが、住民は陳情するだけではなく、市民、商店、大学などのいろいろなセクターが地域社会のプレイヤーになるイメージです。これを私は「コモンズ社会」と呼んでいます。みんながまちを自分のものとして主体的に参加する。そうすると地域社会が最適化すると思いますが、1つのセクターがやると1つの最適になりますが、全体最適を目指す。その仕組みを作るのがこの委員会じゃないかと思っています。

いくつかの事例でわかりやすいものだけ出すと、コミュニティビジネスが生まれたのはイギリスで、例えばスコットランドには行政コミュニティビジネスがあります。ここでは地域コミュニティが役員会を運営して、地域に雇用を生み出しています。例えば、失業してコミュニティに帰っても普通は何もしてくれないですが、このコミュニティには職業斡旋をしたりする会社があるんですね。いわゆるまちづくり協議会が会社になっているんです。これがイギリスでできて、コミュニティビジネスの一番根源的な1つの例となっています。もう一つは、ディベロップメント・トラストというのがあって、これはイングランドですが、衰退した工業地帯で再開発するときに、住民組織が集結して大きなディベロッパーに頼らずに事業を成功させたという例で、トラストというのは信託、信託という意味ですが、地域の人たちが主体的にまちづくり組織を作った例です。日本で言えば、丸亀の商店街なんかがそうですね。大きなディベロッパーではなくて、地元の中で地域再生をしたんです。それを私は地域市民事業と呼んでいて、これをそのまま訳すとコミュニティビジネスなんですね。地域が単なる市民じゃなくて事業を起こす人たち、それをこの協働まちづくりでも推進していけたらと思っています。

社会を変える・地域を変えるプラットフォームということで、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスを広げていきたいと思っています。その部分に一番力を入れてきましたが、先ほど、社会を担うのは多様な連携ですが、地域住民がその地域を行政のものでも企業のものでもない共有のものとして捉えたときに、そこから事業が生まれることが市民協働の先にある世界じゃないかと思っています。企業も商工会議所も含めて、みんながつながるフィールドができると思うんですね。

改めて考えると、阪神大震災があって東日本大震災があったというのは、20世紀から21世紀にかかる大きな転換期だと思います。その転換期があり、我々は地域を主体とする事業をどう作っていくかと手引きや協働提案事業を手掛けてきたと思うので、それをしっかりと広げていければいいと思っています。

これは2014年の7月です。せんだい市民カフェということで、司会の遠藤智栄さんは、数多くの皆さんとつながりがあると思いますが、これも協働まちづくりの大事な前身になったと思います。2015年の10月には、ちょうど奥山市長のときに、この協働まちづくり推進のための基本方針の答申をしました。その後、マチノワ WEEK を作って、市民協働から協働まちづくりが中心になってきました。奥山市長に登壇していただいてディスカッションやりましたので、私としてはこういう新しく政策が少しまとまってきた段階で、ぜひ郡市長にも出ていただきたいと思います。来年度、そういう企画があったら市長に呼び掛けて、協働まちづくりがやってきたことをこれからどう展開するか、市民局として企画していただきたいです。その後、協働まちづくりの実践で公開座談会を開催しました。2018年2月には市民活動サポートセンターの強化がありましたが、ここまでアクティブにやっている委員会はそうないと思うので、私も頑張ってきましたが、本当に委員の皆さんには粉骨砕身で頑張ってください、やっところまで来ました。この道のりを市民の皆さんにも知っていただけてつなげていかないと続かないということで、2018年の3月に協働まちづくりの手引き・実践を作り、一通りまとまりができたと思います。だからこそ、今やらなければいけないのは、これをしっかりと活用していただくことなんですよね。というのが3期の大事な使命だと思います。ミラソンをやったり、若者アワードをやっていただいたりして今に至ります。

最後のまとめとして、私としては、21世紀は成長社会から成熟社会に移ってきていると思うんです。そういう社会変革に対して何ができるのか。東北地方は、やはり豊かな自然と歴史、それと少子高齢化や地域経済の衰退もあり、豊かな資源と課題を両方秘めているんですね。東日本大震災があって、全国、世界から注目されているので、大災害と先進的な課題を結びつけて何ができるのかということです。私はまちづくりの専門家としてずっと唱えてきましたが、持続可能社会というのは、行政、企業、市民、大学といった多様なセクターの連携でしか生まれないんですよね。1つのセクターではなくて、多様なセクターでソリューションを作れるということです。社会的な枠組みを超えた持続可能な社会が今一番必要とされています。そのために大学なり、行政なり、それぞれが求められる役割があると思います。ただ、教育者として見ると、学際的な視点と地域社会に密着した実践的な手法、この東北の先端的なフィールドと社会を科学的に分析する力、これらが大学の役割だと思います。その中で、戦略的なソリューションを提案する実践的な人材育成を心掛けてきました。

協働のまちづくりとは何か。東北という何かすごい歴史のあるところで震災が起きたのも、やはり1つのメッセージだと思います。つまり世界に向けて発信できるんですよね、東北って。今、一番のテーマは持続可能な社会です。その持続可能を提案し、実現するために、今、大学で私自身も考えているのがグローバルソリューションです。地域を考えるときに、世界、地球規模で考えることがすごく重要だと思っています。地域住民がプラットフォームを作って何かをできるところまで来たので、今度何を作るかというときに、そ

のローカルなことを世界的につなげて解決できたりすることがあったり、こういった多様なセクターを連携して何ができるかをしっかりと実現していく段階に入っています。この協働まちづくり推進委員会で作ってきた提案はとても先進的なものばかりです。それをしっかりと仙台市民にわかっていただいて、また皆さんがスポークスマンになって広げていくことがこれから重要になるということで、私からの総括とさせていただきます。

ということで、私に関わってきた中でのいろいろな思いもまとめて話をさせていただきました。何かこれを通じて議論しておきたい点があれば、ぜひお願いしたいと思います。

いずれまた機会を作っていたいたときには、もっと長く話ができればと思います。

ご意見をいただければと思いますが、協働まちづくりには私も約10年関わっていますが、やはり大転換だったと思います。それをぜひ、3期の協働まちづくり推進委員会の皆さんには理解いただいて、また、誇りを持ってそれを広げていっていただきたいと思います。そのためには、リーフレットで今までの歴史を振り返り、作り上げてきた政策を一体的に理解していただき、また、今日も議論にあったように、我々がまちづくりに入る方の窓口、入り口、出口になっていければと思っています。

3 報告

(1) 市民活動や協働によるまちづくりに関する意識調査の実施について

[風見委員長]

以上で議事は終わりました、報告に移ってもよろしいでしょうか。事務局から報告をお願いします。

[事務局（企画係長）]

資料2と資料2の別紙1をご覧ください。

仙台市では、これまで条例に基づきまして、市民活動を行いやすくする環境づくりや、さまざまな団体がまちづくり活動に連携・協力して取り組めるよう、各種事業を進めてまいりました。今回の調査は、こうした取り組みを今後一層進めていくために、市民活動などに関する現状や課題を把握することを目的として実施するものです。また、現行の協働まちづくり推進プランの計画期間が来年度までとなっておりますので、その次のプランの検討にも役立ててまいりたいと考えております。

資料2の(1)の実施方法については、本市では市民活動団体などの団体を対象とした調査を平成28年度に実施しておりまして、昨年度は宮城県でも実施されておりますが、個人に対する調査は条例制定後、実施しておりませんので、今回は個人の方を対象に実施するものです。市政モニターの方200名のほか、どなたでもご回答いただけるように、市のホームページ上からも回答を受け付けることにいたします。また、先行して、今月行われております本市主催の市民活動のイベントで、主な設問を抜粋した形で参加者の皆さんにも回答をいただいております。

(2)の質問内容ですが、市民活動への参加経験や、協働によりまちづくり活動を進める上で課題と感じていること、必要と考えられる支援などについて伺うものです。別紙1が調査票の案ですので、委員の皆様からご意見などをいただければと思います。

スケジュールにつきましては、1月に調査を実施しまして、年度内には結果の公表までを行う予定です。

市民意識調査の説明については以上です。

[風見委員長]

以上につきましてご質問等、何かございますか。

[石塚委員]

この調査票の設計はどこで行われたのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

事務局が設計しております。実は同様の調査を、今の協働条例ができる前の平成12年に実施しておりまして、それとの比較ができるように、また、当時は協働という考え方自体がなかったため、現在の協働に関する内容を追加し、まずは原案を作ったところです。

[石塚委員]

報告事項なので、協議ではないと思いますが、今日ご欠席の西出先生は、このあたりも専門だと思しますので、アドバイスをいただいてもいいと思いました。

[風見委員長]

他にございますか。

皆さん何かお気づきの点があれば、忌憚なくご意見いただければと思います。

(2)その他

[風見委員長]

事務局から何か他にありますか。

[事務局（事業推進係長）]

先ほど議論の中でありましたが、イベントについてご報告させていただきます。

今年度の協働まちづくり推進助成事業の中間報告と併せまして、助成事業実施団体のサポートを行っております中間支援組織の皆さんによるパネルトークや、来場者との意見交換を行うイベントを12月2日に市民活動サポートセンターで開催いたします。この助成事業を活用している取り組みの紹介などを通じて、協働の始め方あるいは取り組みの効果な

どを発信いたしますとともに、今後この助成事業の活用に結びつくような複数の団体による協働の促進、きっかけづくりを目的に開催するものです。ご都合が合いましたら、ぜひご来場いただければと思います。

[風見委員長]

日程が迫っていますが、もしお時間があればご意見をいろいろ言ってきていただきたいと思います。よろしくお願いします。

全体について他に付け加える点はございますか。大丈夫ですか。

それでは、次が3月になりそうなので、先ほどの課題についてはまた事務局で少したき台を作ってください、特にデザイン面は、委員会全体と分科会によく議論していただいたと思いますので、それを理解しながら続けていただければと思います。

先ほど申し上げたように、今までの政策をいかに市民につなげていくか、再度このリーフレットを検討していただき、来年はそれを生かして、しっかりと広げていくことがこの委員会の重要な使命だと思います。次回に向けて意見等がある方は、またメール等でよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、今日はこれで終わらせていただきます。活発なご議論ありがとうございました。

4 閉会

[事務局（企画係長）]

風見委員長、ありがとうございました。

以上をもちまして令和元年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。次回の委員会は3月を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。—了—

〈議事録署名人〉

[委員長]

風見 三子

[署名人]

佐藤 直子